

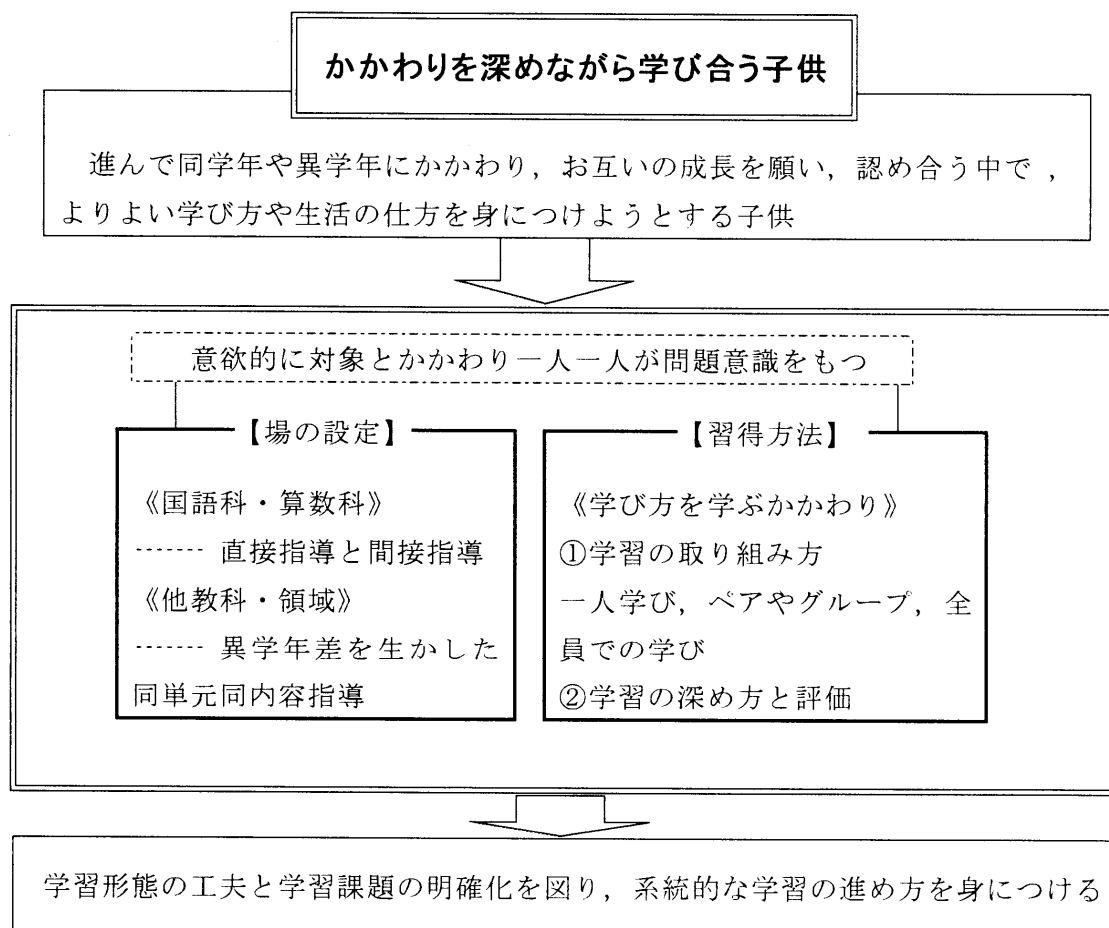
自ら問題意識を持ち、かかわりを深めながら学び合う複式教育

豊かな学びを培う話し合い活動

I 研究テーマについて

1 複式教育での学びについて

複式教育では、各教科や領域において体験活動や話し合い活動を通して、異学年や同学年の子供同士がかかわり合う場を多く持っている。その中で、一人学びやペアでの学び、集団での学び方を豊かに、確かに身につけることを願って、学びの過程を大切にしてきた。教師は普段の学校生活や授業において、複式教育の特性を最大限に生かした効果的な指導のあり方を探りながら、子供一人一人の問題意識を掘り起こし、子供たちが自分なりの方法で課題追究できるように支援している。



2 複式教育の特質と学習文化

複式学級の特性とは、「異学年集団による構成」「少人数の学級構成」である。

少人数であるということは、必然的に一人一人が学級内で果たす役割が大きくなり、責任感を持って物事に当たることができ、個性や能力を発揮する機会が多くなる。また、

同学年の友達と6年間一緒に過ごしたり下学年と長く過ごしたりすることにより、家庭的でお互いによく理解し合った思いやりのある人間関係が育まれる。

このように、複式学級での異学年集団は、上学年の子供が下学年の世話をしたり、下学年の子供が上学年の子供を観察して学び方や生活の仕方を真似たりすることで、より多くの立場を経験することができる。つまり、兄弟関係に近い社会的集団の構成と言えるだろう。こういったことが、子供のバランスの取れた成長を助け、自己理解と他者理解を進めることができると考えられる。

①対象・他者・自分とのかかわり方

複式教育に限らず、これからの子供たちの学びは、自然や人とふれあい、現実社会の出来事や、子供たちの周りの人々から直接にかかわって学ぶことが重要であると考ええる。

子供たちが会える対象や他者とのかかわりを大切に、一人一人が実感を持ち、納得のできる学びを進めていきたい。そして、自分とは異なる立場の人を理解し、社会の構成員としての自覚や自然と共存して生きていこうとする態度や心情を養わせたい。

また、自分らしい感じ方や物の見方に気づき、他者の考えと比べながらお互いのよさを発見し、自分に取り入れながらよりよい自分を作っていくことを願っている。それによって、思考の深まりや広がりが図られ、成長していくものと考ええる。

子供たち同士のかかわりの中には、よく観察してみると、自己中心的な支配的、権力的なかかわりが、しばしば見受けられる。適切なかかわりには、表現する上での相手の立場を理解しようとするコミュニケーション力が不可欠である。自分の考えばかりに固執しない柔軟でのびのびした心情が大切であるとも言える。

②複式学級全体を通したつながりを大切に

複式学級では、子供自身の固有の経験や思いが生かされ、学級内のそれぞれの考え方の違いや良さを肯定的に受け止めることが必要である。こういった学級の受容的な雰囲気、お互いの助け合い、高め合う学びを支えているのである。そういった学び合いの場において上学年の子供が下学年の子供にアドバイスをしたり、そっと見守って手を貸してあげたりする自然な縦のかかわりが生まれる。そうして、複式独自の所属意識が高められ、リーダー性とフォロアーとしての役割の大切さを身につけ、個々の成長や学びが確立されていく。少人数と異学年の良さが、遊び、学習、生活の全般においてよい意味でのかかわりの基盤やルールを築き上げ、複式教育の学習文化を創り上げているのである。具体的には、学年別指導が中心である国語、算数の教科の間接指導時において、司会者が中心になって課題に取り組み、お互いが相手の話をよく聞き、自分の考えをしっかりと説明する話し合いによって学習を進めている。質問やアドバイスを受けたり、図や絵に示すなど「もっと分かりやすく」「もっと的確に」という表現の工夫や改善をしながら説明力が伸ばされていく。

また、学習形態、聞き方や話し方のスキル、ノートのとめ方やメモの取り方、授業

中のマナーや言葉遣い、異学年グループやペアでの活動のあり方なども学習文化を支える重要な要素と考えられる。複式学級の学習や生活では、お互いの「認め合い」「分かり合い」「助け合い」「磨き合い」が主体的に行われることを大切にしていきたいと考える。上学年と下学年のかかわりを通して培った学び合う態度、また、間接指導で身に付けた自分たちで学ぼうとする力を発揮することによって、豊かな感性や表現力を育成することが期待できる。個人学習では、自分なりの思いや願いを持って課題を選び、時間をかけて、「見る」「気づく」「挑戦する」「考える」「伝える」「広げる」といった様々な対象へのかかわりを通して解決していけるものとする。

複式教育の特性を生かして、学習を深めるために今年度は、話し合い活動に重点を置いて取り組んでいる。

Ⅱ 研究の方向と課題

1 話し合い活動の重視

学年別指導での算数科と国語科では、教科の特性を生かしながら、豊かな学習ができるように配慮することが必要である。上・下学年の子供が共通に学べるような学習単元や活動の場を設定し、子供の多様な見方・考え方を引き出すようにしたいと考えている。そのためには、間接指導時の話し合いの成立が不可欠である。間接指導での学習効果を上げるためには、子供たちが集中して学習に取り組む意欲と何について学習しているのかをしっかりと把握して意見を出し合うことが大切であるとする。家族的な親しさがともすれば緊張感のない退屈で惰性的な話し合いになることがしばしば見られる。また、説明力や語彙力の不足する子供がコンプレックスを抱くことがないように、互いに認め合いながら高まり合っていけるような集団を育成することが大切である。協力して質の高い学習を作り上げ、楽しさや喜びにつなげながら、自分たちで学習する意欲を持てるような手だてを探っている。例えば、話し合いが停滞したとき、観点を再度確かめたり、意見の違いを整理したりするような積極的な司会者の役割意識を育てること、課題解決のめあてを設定して一人学習に取り組ませることなど時々に応じて、教師が判断し介入することも必要である。ワークプリントや個人用のホワイトボードなど視覚的に理解できる教具など、話し合いを助ける教材の開発も行う必要がある。

2 取り組みの方向と課題

こういった観点を踏まえながら、各学年や発達段階に応じた学び方を育てることを大切にして研究を進めている。また、低・中・高別に目指す子供の姿として、1・2年では「授業中の学習ルールがわかり、元気よく学習に取り組むことができる子供」、3・4年では「学習の進め方や仕方がわかり、意欲的に学習に取り組むことができる子供」、5・6年では、「自分から見通しを持って学習計画を立て、主体的に学習に取り組む子供」を育てたい。話し合い方の自己評価・相互評価についても基準の明確化を図っていく必要があるとする。